【研究論文】

ジェンダーの立場から見た『源氏物語』の嫉妬の表現
――「ねた」を語幹とする言葉の分析を中心に

黄建香

要旨

本稿では『源氏物語』において「ねた」語類の感情をもつ主体として男女差があるかどうかについて調べた。その結果、本来、女性の、夫の多情に甚だしい怒りを覚える心情を表す「ねた」語類は『源氏物語』では男性主体に多用され、女性主体の用例は男性の用例の四分の一に過ぎず、女性の使用は慎重ではありながら、男性より多彩で複雑な様相を呈していることがわかった。同語類の評価的意味について、男女の用例はともにプラス表現、中立表現、マイナス表現の三つに分類できるが、男性の登場人物の用例は中立の意味合いに偏り、女性の用例数は男性に比べて少ないものの、マイナスイメージが目立っている。また、男性の場合、同語類は会話と心話に多く用いられ、女性の場合、ほとんど地の文に用いられている。「ねた」語類の使用が女性の主体に、さらに女性の会話と心話において少ないのは、作者が女性に負の属性を付与するのを控える心理が働いているからなのではないかと考える。

キーワード：ジェンダー、源氏物語、「ねた」語類、嫉妬

1. はじめに

ジェンダーという視点が『源氏物語』の研究に導入されて約 20 年（国文学研究資料館電子図書館の論文目録データベースでの検索による）になり、今までに数々の研究成果が出されている。ジェンダーと日本語の観点から『源氏物語』を研究した成果も報告されている[注1]。

『源氏物語』において、「ふすぶ」、「そねむ」、「恨めし」など嫉妬の情を表す言葉は様々ある。本研究では、嫉妬の場面が数多く登場する『源氏物語』において、始原的に嫉妬の意を持つ「ねた」を語幹とする言葉（以下「ねた」語類と略称する）の使用主体の性別によってその用法に違いがあるかどうかについて考察することを通して、同作品の言葉遣いの様相の一端を明らかにしたい。

嫉妬について、陳（2008）では心情語「妬し」「妬む」「妬まし」などの使用状況や意味変化に関して古代から現代まで通時的に調べている。望月（2009）では『源氏物語』における嫉妬の現象について考察がなされ、弘徽殿大后や髭黒のもとの北方など激しく嫉妬する女性像が明らかにされたが、ほかの女性の登場人物には言及していない。また、『源氏物語』における男女の言葉遣いについては、佐藤（2006）では「宿世」という語を通して、コミュニケーションの仕方と語彙の用い方からその違いを指摘しているが、「ねた」語類についての研究は管見の限り見当たらない。これらの先行研究に導かれながら、『源氏物語』における「ねた」語類の使用状況を男女別に分析し、その使い分けと表現法を明確にするのが本稿の目的である。

2. 「ねた」語類の意味性

『岩波古語辞典』での語釈によると、「ねた」語類は「憎む」「いまいましく思う」が代表するマイナスの意味合いがメインだが、「うらやましい」のようにプラスイメージもあり、プラスとマ

Copyright © 2016 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

イナスの両方の使い方があると解釈することができる。

古代中国では妬婦（嫉妬する婦人）は非難の対象であった。西漢（紀元前 202－紀元８）の儒学書『礼記・本命』には「婦有七去」の規定がある。即ち、「不順父母去、無子去、淫去、妬去、有悪疾去、多言去、窃盗去」である。その中の「妬去」は、夫のほかの女に嫉妬する妻は家から追い出してもいい、という意味である。

唐の律令を参考に制定された日本の律令（700 年頃）においても、夫の意志によって離婚できる事由について似た規定がある。

> 凡棄妻。須有七出之状。一無子。二淫。三不事舅姑。四口舌。五盗窃。六妬忌。七悪疾。（律令・戸令・第 28 条）[注2]

「妬忌」をしたら離縁されてもしかたがない、と言っている。

「ねた」は、その当て字「妬」または「嫉」の女偏が示すように、本来は女性のヤキモチを表す言葉だっただろう。日本の文献上、最初に出てくるのは『古事記』であり、同書の女神や女性の欠点と言えば嫉妬する性格である。大国主神の「嫡后」スセリビメは「甚く嫉妬為たまひき」[注3]（上巻）と記されている。仁徳天皇の大后イハノヒメノミコトも激しい嫉妬をする女性の代表者である。「甚多く嫉妬したまひき。故、天皇の使はせる妾は宮の中に得臨まず。言立てば、足もあがかに嫉みたまひき。」（下巻）と描かれている。この二人に関する用例は、妻が夫の愛する第三者の女性に対して憎む気持ちを表す言葉だと言える。

「嫉妬」は本来、女性のヤキモチの意味の専用語で、女ならではの属性を付与されていたのだが、『日本書紀』になると男性にも使われるようになった。スサノヲノミコトは姉の田が良い田で、自分の田が痩せ地であるために「妬みて姉の田を害る」[注4]（神代上）のである。このように、使用主体が女性にしても男性にしてもマイナス表現となっているのは疑いの余地がない。

ところが、『万葉集』となると、違った使い方も現れる。

> ほととぎすいと妬けくはたちばなの花散る時に来鳴き響むる[注5]（万葉集 4092）

この歌は橘の花が散る時、来て鳴き騒ぐほととぎすに対して憎らしい気持ちを表してはいるが、相手は鳥だから、記紀の用例と同列に扱うことはできないだろう。

ほかの文献の用例についてはここでは触れないが、陳（2008）の調査によれば、中古文学において「ねた」語類が一番発達し、さらに『源氏物語』においてその用例が一番多いことがわかる。以下、『源氏物語』での使用状況について考察したい。

3. 『源氏物語』の「ねた」語類の使用状況

3.1　用例調査

『源氏物語』では動詞「ねたがる」「ねたます」「ねたむ」の活用形と、形容詞「ねたし」および複合形容詞「なまねたし」「心ねたし」の活用形、形容動詞「ねたげなり」、「ねたましがほなり」の活用形、それに名詞「ねたさ」の用例を確認できる。これらを「ねた」語類と呼び、すべて統計の対象とした[注6]。なお、本稿で考察するのは「ねた」語類の使用主体の性差についてであって、妬まれる対象についてではない。

以下の表 1 に示すように、延べ数 92 例のうち、男性の使用率は女性の 4 倍強になる。男の登場人物は 14 人で、女の登場人物は 15 人である。主人公光源氏や薫君が使用主体となっている例が多く、葵上、藤壺、宇治の中君、浮舟などの主要女性人物の用例が見当たらず、表に掲げた女性の登場人物には六条御息所のほかには 1 例ずつしかない。男性登場人物と女性登場人物の人数はほぼ等しいのに、男性の用例が圧倒的に多いのは何を意味しているのだろうか。用例のある女性の登場人物には何か特徴があるのか。これらの疑問を解明するために、当該語の性質や場面の文

Copyright © 2016 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

脈を考えながら、用例を男女別に考察した。用例を見ていくと、プラスの表現、中立の表現、マイナスの表現があることがわかった。そのため、各用例の評価的意味に基づき、プラス表現、中立表現、マイナス表現に分類した。好意的な評価の場合はプラス表現とし、相手のことをにくらしく思うが悪意がない場合は中立表現とし、相手に悪意をもった結果、不利や害を及ぼすような行為につながる場合はマイナス表現とした。また、紙幅の都合上、全部の用例を見るのが不可能であるため、意味の重複するものは一つひとつ挙げずに、代表的な意味をもつ例を挙げていく。

表 1　『源氏物語』における「ねた」語類の使用状況

性別（用例数）	回数	使用主体	使用率（%）
男性（75 例）	30	光源氏	約 82
	10	薫君	
	9	匂宮、頭中将	
	5	夕霧	
	3	朱雀帝	
	2	紅梅	
	1	ある上人（帚木巻左馬頭の体験談に出た殿上人）、冷泉帝、蛍宮、柏木、右近の姉の「先の男」、今上帝、雲居雁の兄弟	
女性（17 例）	3	六条御息所とその物の怪	約 18
	1	指喰ふ女、髭黒のもとの北方、弘徽殿大后、紫上、紫上の継母、秋好中宮、雲居雁、落葉宮、大君（八宮の長女）、光源氏の昔の女（花散里巻）、末摘花の叔母、浮舟の母、中君（八宮の次女）の周りの人、宰相君（玉鬘付きの女房）	
延べ数	92		

3.2　男性主体の使用例の分析

男性の用例は、表 2 のように大きくプラス表現、中立表現、マイナス表現に分類できる。

表 2　男性の用例の評価的意味の分類

評価的意味	用例数（人物）	使用率（%）
プラス表現	3（光源氏）	4
中立表現	71（光源氏ほか）	約 95
マイナス表現	1（右近の姉の「先の男」）	約 1
延べ数	75	

3.2.1　プラス表現

他人の文字や和歌（用例略）、音楽などを高く評価する場合、プラス表現とする。

(1)これ（明石君）は、あくまで弾き澄まし、心にくくねたき音ぞまされる[注7]。（明石・一七）（原文引用中の（　）と下線は筆者による。以下同）

(1)は明石君の弾奏した箏の琴の音がねたましくなるほどすぐれている、と解釈できる。中古における「ねたし」の連体形「ねたき」について、陳（2008）で、人にその気持ちを生じさせるような物事の素晴らしい状態を表す場合があると述べているとおりである。

Copyright © 2016 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

3.2.2　中立表現

男性が気に入った女性に拒まれ、憎む気持ち（光源氏ほか）は中立表現とする。

(2)深山木に羽翼うちかはしゐる鳥のまたなくねたき春にもあるかな（真木柱・一九）

(3)（光源氏の心話）あはれと思しぬべき人のけはひなれば、つれなくねたきものの、忘れがたきに思す。（夕顔・六）

(4)（光源氏の会話）なほあなたに渡りて、ただ一声ももよほしきこえよ。空しくて帰らむがねたかるべきを。（末摘花・三）

(2)はただ 1 例だけ和歌に詠まれたもので、蛍宮から玉鬘への贈歌である。蛍宮は恋情を抱いた玉鬘が髭黒の妻になったのを残念がっている。「又鳴く音」に「またなく妬き」をかけ、字面ではねたましい対象は春となっている。(3)は自分の気持ちを拒絶した空蝉を憎い女と思うものの、忘れがたい光源氏の心情である。(4)は光源氏が末摘花を推薦した命婦に向けた発言で、姫君の優れた琴の音を聞かないで帰るのが忌々しいと文句を言っている。用例数が一番多い光源氏の用例は、女性に対する懸想がかなわぬ悔しい気持ちという意味がほとんどである。

それから、光源氏と頭中将、薫君と匂宮のように、二人の男性が一人の女性をめぐって競い合う場合も中立表現とする。

(5)この君（光源氏）のかう気色ばみ歩きたまふを、まさにさては過ぐしたまひてむやと、なまねたうあやふがりけり。（末摘花・五）

(6)（薫君の心話）口惜しう、この御ゆかりには、ねたく心憂くのみあるかな。（蜻蛉・一九）

(5)では、頭中将が光源氏の末摘花に対する熱意を見て、恋のライバルの存在を知り、ヤキモチを抑えられない。(6)は浮舟との間に匂宮に割り込まれて激しく嫉妬する薫君の心の表出である。

(5)と(6)のように、光源氏と頭中将、薫君と匂宮の間での女性をめぐる争いの表現には「ねた」語類の使用率が高い。

(7)（朱雀帝の会話）久しく世にあらむものとなむさらに思はぬ。さもなりなむに、いかが思さるべき。近きほどの別れに思ひおとされんこそねたけれ。（須磨・一四）

最上位にいる帝も嫉妬する帝像に描かれている。朱雀帝に 2 例、冷泉帝と今上帝に 1 例ずつ確認できる。(7)は明らかに朧月夜と光源氏の間柄に対する嫉妬であり、朱雀帝は朧月夜が宮仕えしていても過去に光源氏と関係があったため、ヤキモチを焼いているのだ。

3.2.3　マイナス表現

右近の姉の先の男が後の男を殺す場合はマイナス表現である。

(8)（右近の会話）右近が姉の、常陸にて人二人見はべりしを、ほどほどにつけては、ただかくぞかし。これもかれも劣らぬ心ざしにて、思ひまどひてはべりしほどに、女は、今の方にいますこし心寄せまさりてぞはべりける。それにねたみて、つひに今のをば殺してしぞかし。さてわれも住みはべらずなりにき。国にもいみじきあたら兵一人失ひつ。また、この過ちたるもよき郎等なれど、かかる過ちしたるものを、いかでかは使はんとて、国の内をも追ひ払はれ、（後略—筆者　以下同）（浮舟・二六）

(8)は雅の世界に一人の殺人犯を登場させた異例の例である。浮舟を奪い合う薫君と匂宮が同じく深い情愛をかけているため、浮舟は二人の間で迷ってしまう。彼女を戒めるために女房の右近が自身の姉の実例を持ち出したのである。姉が二人の男性の情を受けたために、先の男が後の男を殺してしまい、報いとして罪を犯した男は国から追い払われ、姉ももとの地方にいられなくなったという恐ろしい話である。「それにねたみて、つひに今のをば殺してしぞかし」の述べ方から、

Copyright © 2016 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

後の男を殺した動因は「ねた」むことで示した痛切な嫉妬心であることが分かる。

今まで見てきたように、最上位の天皇及び当代一流の貴公子の光源氏や頭中将、薫君、匂宮であっても、男女の仲となると身分を問わず妬む主体となることがある。ただし、男性の用例はマイナス表現に分類されるものは少ない。例(8)の嫉妬ゆえの殺人犯の話は一回性の登場人物に設定され、主要人物とは一線を画している。

3.3　女性主体の使用例の分析

女性の用例も大きく、プラス表現、中立表現、マイナス表現に表 3 のように分類できる。

表 3　女性の用例の評価的意味の分類

評価的意味	用例数（人物）	使用率（%）
プラス表現	2（紫上、雲居雁）	約 12
中立表現	8（秋好中宮、指喰ふ女、落葉宮、大君、昔の女、浮舟の母、中君の周りの人、宰相君）	約 47
マイナス表現	7（六条御息所、弘徽殿大后、髭黒のもとの北方、紫上の継母・末摘花の叔母）	約 41
延べ数	17	

3.3.1　プラス表現

プラス表現の 2 例は紫上と雲居雁に用いられている。男性が可愛いと思う女性のヤキモチの類である。

(9)（源氏が）箏の御琴ひき寄せて、掻き合はせすさびたまひて、そそのかしきこえたまへど、かのすぐれたりけむもねたきにや、手も触れたまはず。（光源氏の心話）いとおほどかに、うつくしうたをやぎたまへるものから、さすがに執念きところつきて、もの怨じしたまへるが、なかなか愛敬づきて腹立ちなしたまふを、をかしう見どころありと思す。（澪標・七）

理想の女性と公認される紫上は嫉妬する性格である。紫上は結婚生活において明石君、朝顔、女三宮らに正妻的地位が揺るがされたことがあった。特に明石君という地方の女性に起因する夫婦間の危機を経験していた。(9)は夫の新妻明石君の存在—しかも夫の子供を生んだ人—を聞かされた時の紫上の態度を語る場面である。表では明石君が箏の琴の演奏に優れていることを嫉妬していると読めるが、実際は光源氏の愛情がほかの女性に移ったのを恨み、子どもを生むという自分ができないことを明石君が実現したのに腹が立つのである。光源氏は紫上のその態度について、嫉妬はしているが魅力的で、むきになりがちながら面白いと評価している。「執念き」「もの怨じ」「腹立ち」等複数のマイナス表現の言葉と、「おほどかに」「うつくしう」「たをやぎ」「愛敬づきて」「をかしう」「見どころあり」など多数のプラス表現の言葉が交錯して用いられることによって、紫上の心的動きを的確に把握しつつ、光源氏の対紫上の認識も理想的といえる段階に至っていく。「ねたき」「もの怨じ」などのマイナス表現の言葉が「愛敬づきて」等との同時使用によって、否定的イメージを肯定的に逆転させる。今井（1976:210）で（紫上は）「朝顔、玉鬘、女三宮などに対する源氏の言動には、警戒、不快の念は禁じえなかったとはいうものの、特に表立ったことはなかった」と述べられたとおりに、明石君の件以降、紫上はヤキモチをやかなくなる。望月（2004:27）も澪標巻の原文を分析した結果、「紫は、「嫉妬」という語で表現される心情そのものを拒否し通している」と指摘している。

つまり、紫上の嫉妬の心情は理性的で、一時的なものである。彼女に用いられた「ねたき」は

Copyright © 2016 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

プラス表現ととらえられよう。

(10)（夕霧の心話）何ごともただおいらかにうちおほどきたるさまして、子どもあつかひを暇なく次々したまへば、をかしきところもなくおぼゆ。さすがに、腹あしくてものねたみうちしたる、愛敬づきてうつくしき人ざまにぞものしたまふめる。（若菜下・二一）

雲居雁もまた嫉妬する女性である。(10)は夕霧の心理描写で、子育ての日常生活に没頭する妻が風情もなくなったが、嫉妬することだけが可愛いと心の中で評価している。夕霧は妻の嫉妬を自分に対する愛ととらえ、「腹あしくてものねたみ」をする様子をかえって「愛敬づきうつくしき人ざま」と思うという述べ方によって、雲居雁の嫉妬という欠点をうまく美徳に転換させたのである。嫉妬はするがちょうどいいくらいで、可愛さを失わない人間性豊かな妻像に造型したところから、雲居雁に用いた「ものねたみ」はプラス表現ととらえられよう。「ものねたみ」から「愛敬づきて」へのつながりは前述の紫上の場合の語り方に似ている。

3.3.2　中立表現

鳥の鳴き声を羨ましく思う場合や女君が男性に迫られるのをいまいましく思う場合（落葉宮ほか）、残念な気持ちを示す場合は、中立表現とする。

(11)夜も明けぬ。朝ぼらけの鳥の囀を、中宮（秋好中宮）は、物隔ててねたう聞こしめしけり。（胡蝶・一）

(11)は鳥の鳴き声を羨ましく聞いている用い方で中立表現とする。

(12)（落葉）宮はいと心憂く、情けなくあはつけき人の心なりけりとねたくつらければ、（後略）（夕霧・二八）

(13)（薫が）屏風をやをら押し開けて入りたまひぬ。いとむくつけくて、なからばかり入りたまへるにひきとどめられて、いみじくねたく心憂ければ、（後略）（総角・三）

(14)（匂）宮は思ひ離れたまひて、心もとまらず。侮りて押し入りたまへりけるを思ふもねたし。（東屋・三四）

(12)は夕霧が侍女の手引きによって落葉宮の部屋に入ろうとした時に、夕霧と手引きした侍女を忌々しく思う落葉宮の心情を描いたくだりである。(13)は宇治の大君に用いた用例である。大君も落葉宮と似た経験をしていた。八宮の一周忌の準備のために宇治を訪れた薫君が屏風を押し開けて大君のいるところに入ってしまったので、結婚を強く拒絶してきた大君はひどく恨めしく思っている。(14)は浮舟の母中将君に用いたものである。浮舟は落葉宮や大君と似た状況に置かれるが、違った態度を取っている。姉の中君のところに預けられた浮舟は匂宮に見つけられてしまう。手を捉えられた彼女はただ「いと恥づかしくせん方なし」（東屋・二四）となっている。この件を報告された母の中将君のほうが匂宮の無礼に憤慨し、忌々しく思うのである。「ねたし」が当事者にでなく、脇役の中将君に用いられているのは自意識を始終語ることのない浮舟にふさわしい語り方だと見て取れる。

(12)から(14)までは嫉妬とは違った、女性がしつこく口説く男性を憎む態度を示しているという点で一致している。また、人物の造型に「ねた」語類の使用によるダメージを与えていない。同語類の使用効果は前掲のほとんどの男性の用例と同じで、中立の意味表現としてとらえられる。

(15)みな馴れ仕うまつりたる人々（女房たち）なれば、安からずうち言ふどももありて、すべて、なほ、ねたげなるわざにぞありける。（宿木・一二）

(15)については、匂宮の新婚の「すべて」が中君の女房たちから見て妬ましいことなのだと理解される。宇治十帖の物語では大君、中君、浮舟の三姉妹をめぐり、薫君と匂宮の二人の貴公子の間に恋のかけひきが繰り広げられるが、結婚したのは中君と匂宮だ。中君が懐妊したころ、匂宮

Copyright © 2016 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

と夕霧の娘六の君との縁談も進められている。家庭的地位が脅かされる状況に置かれる中君は、「いかで気色に出ださじ」（宿木・一〇）とあるように悩みを表に出さない、自制するタイプである。この時の彼女の心情は「つらさ」「思ひ乱れ」「独り恨み」などの言葉で表現されている。自己の気持ちを抑制する中君と対照的に周りの女房たちが主人の代弁者になって不満の意見をたくさんこぼしているのが、この事件の語られ方の特徴だと言える。女房の妬ましい気持ちが悪い事態を招いていないため、中立表現としてとらえられよう。

3.3.3　マイナス表現

物の怪と化身して恨みをはらす場合（六条御息所）や、先妻が後妻または後妻の子供に対して嫉妬する気持ち（弘徽殿大后ほか）、継母が継子を憎む気持ち（紫上の継母）またはそれに準ずるもの（末摘花の叔母）は、マイナスととらえられる。引き続き六条御息所とその物の怪、弘徽殿大后、紫上の継母らに用いられた用例を見ていく。

(16)心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし。（葵・五）

(17)うれしと思すこと限りなきに、人に駆り移したまへる御物の怪どもねたがりまどふけはひいともの騒がしうて、後のことまたいと心もとなし。（葵・一五）

(18)（六条御息所の物の怪の会話）「かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと、一人（紫上）をば思したりしが、いとねたかりしかば、このわたり（女三宮のところ）にさりげなくてなむ日ごろさぶらひつる。今は帰りなむ」とてうち笑ふ。（柏木・六）

(16)(17)(18)は六条御息所及びその物の怪に用いられた 3 例である。六条御息所の嫉妬の念は、新斎院御禊の見物に行く日に車が葵上の随身に乱暴された時からである。いわゆる愛人が正妻にいじめられるケースである。恥をかかされたその時の無念な心情が(16)の「いみじうねたきこと限りなし」の表現に凝縮されている。「限りなし」は彼女の執念深さを強調し、物の怪に豹変する伏線を敷いている。ここの描写は中立表現とは考えにくいだろう。(17)は六条御息所の生霊と父左大臣の死霊が名指された「御物の怪ども」が葵上の出産を妬んで大騒ぎをする場面である。『紫式部日記』の彰子中宮が若宮を出産する場面を彷彿させるところである。「今とせさせたまふほど、御物のけのねたみののしる声などのむくつけさよ」（『紫式部日記』　全集本）との描写と考え合わせると、「御物の怪」と「ねた」の連用は貴人の物の怪が恋敵の産婦を嫉妬する語り口のようだ。(18)は六条御息所の死霊が光源氏の妻紫上、そして女三宮に相次いで憑く場面である。光源氏との不幸な恋のため、彼の妻たちに復讐をし続けるのである。「ねた」語類が六条御息所本人、それからその生霊と死霊に密着して用いられ、さらに「限りなし」「御物の怪」などとセットで使われていることから、同語類は六条御息所という人物の性格を示す一つのキーワードであり、何回となくおぞましい姿で登場している六条御息所に負の属性を付与する言葉だと理解される。

(19)（髭黒）「昨日今日のいとあさはかなる人の御仲らひだに、よろしき際になれば、みな思ひのどむる方ありてこそ見はつなれ。いと身も苦しげにもてなしたまひつれば、聞こゆべきこともうち出できこえにくくなむ。年ごろ契りきこゆることにはあらずや。世の人にも似ぬ御ありさまを、見たてまつりはてんとこそは、ここら思ひしづめつつ過ぐし来るに、えさしもあり果つまじき御心おきてに、思し疎むな。（会話の後半部分省略）」とうち笑ひてのたまへる、（北方は）いとねたげに心やまし。（真木柱・七）

髭黒のもとの北方は激しい嫉妬をする妻として描かれている。嫉妬の意味を持つ「ふすぶ」を北方に多用している（真木柱・一四の頭注による）ことからもその気性がうかがえる。時たまの発狂ぶりは物の怪の仕業ともされる。夫に玉鬘という新しい通い所ができたので思い煩う。(19)

Copyright © 2016 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

は髭黒が玉鬘の家へ出かけようとする夕方に、髭黒が今の夫婦関係を維持するために北方を説得する場面である。話の内容及び夫の笑いながら現状維持を主張する態度に北方は「いとねたげに心やまし」、つまりいまいましく心が痛いばかりである。髭黒は北方にほかの女性の存在を「思ひのどむ」、つまり辛抱してほしいのであり、また「身も苦しげにもてなしたまひつ」「世の人にも似ぬ御ありさま」とあるように、妻の精神の異常を繰り返し強調している。これらの言動が引き金となり、ついに北方の嫉妬心に火を点けてしまう。「ねたげに心やまし」の言い方は正妻の第三者に対する嫉妬の気持ちを露骨に示し、その気持ちは直後の夫に火取りの灰をかける事件につながる。

(20)（弘徽殿大后の会話）帝と聞こゆれど、昔より皆人思ひおとしきこえて、致仕の大　臣も、またなくかしづくひとつ女を、兄の坊にておはするには奉らで。弟の源氏にていときなきが元服の添臥にとりわき、またこの君（朧月夜）をも宮仕にと心ざしてはべりしに、をこがましかりしありさまなりしを、誰も誰もあやしとやは思したりし。みなかの御方にこそ御心寄せはべるめりしを、その本意違ふさまにてこそは、かくてもさぶらひたまふめれど、いとほしさに、いかでさる方にても、人に劣らぬさまにもてなしきこえん、さばかりねたげなりし人の見るところもありなどこそは思ひはべりつれど、忍びてわが心の入る方になびきたまふにこそははべらめ。（後略）（賢木・三四）

弘徽殿大后は光源氏の最強の敵として描かれている。(20)は、光源氏と宮仕えをしている妹の朧月夜との密会の出来事を右大臣から報告された弘徽殿大后が激怒する場面である。大后は光源氏側との間に桐壺更衣の時代からの恨みの根をおろしており、光源氏を目障りに感じている。大后は、致仕の大臣が娘の葵上を兄の東宮（後の朱雀帝）にではなく、弟の光源氏の添臥にしたこと、さらに宮仕えをしている妹の朧月夜も光源氏によって前途を誤ることになったのに対して、光源氏に恨みを抱いている。光源氏へのあらゆる不満は「さばかりねたげなりし人」、つまりあれほど憎らしかった人という言葉に総括され、大后の人物像は一貫してマイナスのイメージで描かれている。

(21)西の対の姫君の御幸ひを世人もめできこゆ。少納言なども、人知れず、故尼上の御祈りのしるしと見たてまつる。父親王も思ふさまに聞こえかはしたまふ。嫡腹の限りなくと思すは、はかばかしうもえあらぬに、ねたげなること多くて、継母の北の方は、安からず思すべし。（賢木・一四）

(21)によれば、紫上が光源氏の庇護のもとで幸せに暮らしているのを誰でもめでたく思っているが、継母だけが憎らしく思うのである。式部卿宮の北方と紫上の仲は継子いじめの枠内でとらえられる。北方は継子の紫上とその婿の光源氏を恨み通している。紫上と対照的に、自身腹の娘たちの結婚がはかばかしくないため、たまらなく嫉妬してしまう。「ねたげなること多く」は、紫上の幸運は北方からしてすべて憎く映るばかりだと理解される。

(19)(20)(21)の主体髭黒のもとの北方、弘徽殿大后、紫上の継母はいずれも光源氏と対立する右大臣系統の女性で、3 人ともに用例があったのは決して偶然の一致ではないだろう。

(22)（叔母の心話）（末摘花は）人にいどむ心にはあらで、ただこちたき御ものづつみなればさも睦びたまはぬを、ねたしとなむ（叔母は）思ひける。（蓬生・五）

(22)は自分の意向に従わない末摘花を、叔母がいまいましく思う場面である。末摘花と叔母の仲は擬継子いじめの型をとっている。叔母と末摘花の母親は姉妹で、叔母は受領の妻という低い身分に下落したため、姉妹たちに侮蔑されていた。そのため、没落貴族の末摘花の家に復讐を謀る。末摘花を自分の娘の使用人として地方へ連れて行くつもりだったが、末摘花は宮家の品格を考え、応じなかった。それで末摘花を憎んでいる。ここでは引用していないが、原文の叔母に対

Copyright © 2016 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

する描写や、そこで強調の意味の係助詞「なむ」が用いられていることから、「ねたし」の語は叔母が末摘花をひどく恨んでいる気持ちを示しており、マイナス表現ととらえられよう。素朴な末摘花とは対照的に、叔母は「心すこしなほなほしき」（蓬生・五）と低俗な人柄に描かれている。

以上、女性の用例を分析してきたように、プラス表現と中立表現に比べて、マイナス表現の用例も多いことがわかる。

3.4　語り方の表現法

用例を地の文、会話と心話の三つにわけて見れば、語り方の男女差が顕著にあることも知りうる。

次の表 4 と表 5 から明らかなように、男性の用例は、男性自身の発話や心話に多く用いられる傾向があるのに対し、女性の用例はその傾向が見えない。男性 75 例のうち、37 例が会話と心話の形で話者自身によって使われ、約 49%を占めている。女性の用例は、17 例のうち、わずか 3 例が話者自身によって使われ、約 18%を占めている。会話と心話に用いられる場合は第一人称自身の心情を示しており、普通には否定的意味はありえない。女性の用例中、3 例のほかはすべて地の文に用いられている。

表 4　男女別「会話・心話」の使用率

性別	総用例数	会話・心話の用例数	会話・心話の比率（%）
男性	75	37	約 49
女性	17	3	約 18

表 5　男女別「会話と心話」の「ねた」語類の用例の使用状況

性別（用例数）	表現別（用例数）	回数	使用主体
男性（37 例）	会話（17 例）	8	光源氏
		3	朱雀帝
		2	薫君
		1	紅梅・今上帝・夕霧・蛍宮
	心話（20 例）	9	光源氏
		3	頭中将
		2	薫君・夕霧
		1	紅梅・冷泉帝・柏木・雲居雁の兄弟
女性（3 例）	会話（1 例）	1	六条御息所（物の怪）
	心話（2 例）	1	末摘花の叔母・光源氏の昔の女

前に触れた陳（2008）の統計によると、『落窪物語』や『枕草子』などの先行作品でも「ねた」語類の用例数が多いことがわかるが、性差の考察をした研究ではないため、男性の用例がいつから増えたか分からないが、「嫉妬する」意味から多義に発展していくとともに現れた現象だと考えられる。また、『源氏物語』において女性の会話と心話にあまり使われない原因は、前述の『古事記』の用例や『律令』の規定の影響から「ねた」語類がもともと女性の悪いイメージの言葉だという意識があったからであると考えられる。

Copyright © 2016 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

4.　おわりに

始原的に女性の、夫の多情に甚だしい怒りを覚える心情を表す「ねた」語類は『源氏物語』では男性主体の使用例が 75 例と多く、それに対して、女性主体の使用例は約四分の一の 17 例に過ぎなかった。ところが、男性主体の用例は、男性の人物像を損なうことがほとんどないのに対し、『古事記』などの「妬婦」の焼印が女性に対する認識に押されているが故か、女性主体における使用は控えめだが、男性より多彩で複雑な様相を呈している。

男性主体についての用例は中立表現に偏っている。『源氏物語』では男性主要人物に負の属性を付与しないためか、彼らに「ねた」語類のマイナス表現の使用を避けているのではないだろうか。一方、女性主体の場合は使用例が少ないが、マイナス表現が目立って多い。なお、マイナス表現は嫉妬で有名な六条御息所以外は紫上、雲居雁、秋好中宮など主要な人物には使われていない。つまり、女性の登場人物の中でも使い分けがされている。

また、男性の場合、同語類は会話と心話に多く用いられ、女性の場合、ほとんど地の文に用いられている。この違いからも「ねた」語類の用い方における男女差を説明できるのではないだろうか。

以上の分析に基づき、『源氏物語』における「ねた」語類をジェンダー的に見れば、明らかに男女の使い分けが存在することがわかった。男性より「ねた」語類の使用を女性の登場人物に、しかしながら女性の会話と心話において控えたのは、女性に負の属性を付与してしまうからだと考えられる。また、女性の使用主体 15 人のうち、六条御息所と弘徽殿大后、髭黒のもとの北方、紫上の継母、末摘花の叔母の 5 人だけ、その用例がマイナスに捉えられる。『源氏物語』において「妬婦」の描写が控えられたのは、本文の「2.「ねた」語類の意味性」で触れた、女性が妬忌をしたら離縁されることがあるといった律令制の女性に対する厳しい規定をある程度反映しているのではないだろうか。即ち、律令制のもとで、男性は「ねた」語類を自由に使えたが、女性は心の中で嫉妬する感情を抑えなければならないという意識が、『源氏物語』では働いたのではないかと考えられる。

＊本稿は 2015 年 10 月に上海交通大学で開催された「2015 年　文化の越境とジェンダー　国際シンポジウム」での発表を元に、改稿したものである。

注

1．ジェンダーと日本語の視点から『源氏物語』を研究したものは、三田村雅子氏の「夕霧物語のジェンダー規制―「幼さ」・「若々しさ」という非難から」（2004『解釈と鑑賞』,65-12）、近藤みゆき氏の「男と女の「ことば」の行方―ジェンダーから見た『源氏物語』の和歌」（2004『源氏研究』,9）、佐藤勢紀子氏の「『源氏物語』とジェンダー―「宿世」を言わぬ女君」（2006『日本語とジェンダー』　日本語ジェンダー学会）などが挙げられる。（本文に戻る）
2．井上光貞［ほか］校注　1994　『律令』　岩波書店, 234.　（本文に戻る）
3．本稿での『古事記』の引用は『日本古典文学全集』（1983　小学館）による。（本文に戻る）
4．坂本太郎［ほか］校注　1994　『日本書紀』　岩波文庫（本文に戻る）
5．木村清一郎訳　1962　『万葉集』　古典日本文学全集　筑摩書房, 249.　（本文に戻る）
6．用例の統計は柳井滋［ほか］編『源氏物語索引』（1999　岩波書店）を参考にした。（本文に戻る）
7．本稿での『源氏物語』の引用は『新編　日本古典文学全集』（1994　小学館）による。巻名と小見出しの番号を示した。（本文に戻る）

［参考文献］

今井卓爾　1976　『物語文学史の研究　源氏物語』　早稲田大学出版部

Copyright © 2016 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

鬼束隆昭　1991　「源氏物語と中国史書における妬忌—后妃伝から虚構の宮廷史へ」『源氏物語と平安文学』, 2, 3-27.
佐藤勢紀子　2006　「『源氏物語』とジェンダー—「宿世」を言わぬ女君」『日本語とジェンダー』　日本語ジェンダー学会,109-120.
陳崗　2008　「心情語「妬し」「妬む」「妬まし」の系譜」『解釈』　解釈学会, 644・645, 4-12.
藤澤友祥　2010　「石之日賣命の嫉妬—「嫉妬」による排除」『国文学研究』,161, 1-11.
藤本勝義　1994　『源氏物語の想像力—史実と虚構』　笠間書院
三田村雅子　2000　「源氏物語のジェンダー—「何心なし」「うらなし」の裏側」『解釈と鑑賞』, 835, 119-126.
望月郁子　2004　「紫のいわゆる「嫉妬」」　二松学舎大学人文論叢, 72, 21-40.
望月郁子　2009　「源氏物語「嫉妬考」」『国文学』, 788, 學燈社, 25-33.

（コウ　ケンコウ・上海交通大学准教授）

目次に戻る

Copyright © 2016 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.